

住宅地における 自然教育の 在り方に関する考察

-虫の音に踏み込む環境装置-

羽原研究室

222055 吉田ひかり

人間は昔から多くの生き物と関わり生活してきた。生物種のなかでも、昆虫は地球上で最も繁栄しており、地球環境と密接かつ不可分な関係を有している。また、日本は古くから世界でも稀な、昆虫に親しむ文化を持つ。虫の音を楽しむ文化として、江戸時代の「虫売り」など、古今和歌集に虫の音を愛する歌が残されている。虫の音は季節や憧憬を想起させ、人間の耳に心地よさを感じさせる効果がある。しかし、近年先進国を中心に子供の自然体験の頻度が減少しており、「経験の消失」と呼ばれている。「経験の消失」は、大人になってからの環境保護意識の低下を招く。これを食べ止めるためには、幼少期の自然体験の機会と、意欲の向上が必要といえる。また、人は自然に対する驚きや感動を覚えることで、知識や人間性が培われていくと考えられ、子供は自然とふれあう中で身体活動を行い、遊びを通じて人生学を学ぶとされる。これらを踏まえ、自然体験を行うための施設が1960年代以降全国各地に建設された。しかし、1980年代から90年代にかけて子供たちの自然体験の機会が失われていることが報告されているまた、全国にキャンプ場は5766件存在しているものの、これら自然体験ができる施設の多くは住宅地から遠方に建設されている。この事実から、自然体験は身近な存在であるとは言い難い。

現在日本では、都市部で緑被率が減少している。さらに、郊外における住宅増加などの都市化に伴い街中の緑地が減少し、野外で鳴く虫を楽しむ文化が衰退していることを報告している。街中において鳴く虫が生息できる緑地条件は、既存の緑地を整備することが有効であると示されたが、安易に雑草地を整備することは街の治安や景観の悪化を招く恐れがあることも懸念された。また、筆者の居住地周辺においても住宅増加による緑地の減少が確認できる。

以上より、本研究は自然とふれあうことが身近ではなくなった人々に対し、昆虫との共存の重要性を再認識できる空間の創出を目的とする。研究により、住宅地にある草地を保存することは最も身近に自然体験の機会を得る手段であり、子供たちの成長に大

